

住友生命・アクサ生命

「ウエルエイジング共創ラボ」本格始動

2社の「強み」と「補完」で成果導く

住友生命とアクサ生命による「ウエルエイジング共創ラボ」が本格的にスタートした。両社は昨年10月に「介護関連サービスの共同開発および共同利用」で基本合意し、同合意に基づいて翌月、ラボを開設。12月には、共同投資の第1弾として「高齢者施設紹介サービス」を提供する大阪市の株式会社(株)笑美面(えみめん)と資本提携し、両社がそれぞれ普通株式の3・13%を取得した。今後、提携先事業者を増やし、2019年度中にはパイロット事業をスタートさせる予定だ。同ラボを主導する、アクサ生命の太田高恭氏と住友生命の工藤恭平氏は、「本来ライバル関係にある生保2社が同じ方向に向かってサービスを一から考える取り組みは業界で初めてだ。強みを出し合うとともに、補完しながらプラットフォームづくりに取り組みたい」としている。両氏に、同ラボスタートの背景や今後の展望を聞いた。



太田氏(左)と工藤氏

——介護関連の共同開発・共同利用やラボスタートの背景は。

工藤 65歳以上の高齢者数は、2025年には3650万人を超えると予測がある。一方で、公的介護保険制度が複雑であることに加え、例えば特別養護老人ホーム、有料老人ホームといった介護施設について、それぞれがどんな施設か、どこ

のようには選べばよいのか、適切な情報を得ることが難しい。

太田 2社の知見やノウハウ、ネットワークを生かして事業者とコネクしていくことで、より良いサービスが提供できると考えた。このラボで、社会的課題の解決につながる新サービスを創出した。また、産学連携による介護サービス

——ラボの陣容、両社の強みは。

工藤 現在、アクサ生命の3人のラボ専任者が交代で加わって、ラボでの検討を進めている。「人生100年時代」といわれる中で、住友生命は「健康長寿社会

の実現」、アクサ生命は「お客さまの人生を守るパートナーになる」という、相互に共有できる価値観を掲げて取り組んでいる。

太田 住友生命は、健康増進型保険、住友生命の導入でもお分り通り、先進的な商品開発のスピード感が違う。アクサ生命は、世界の生保

ランドとして9年連続世界ナンバーワン(インタナショナルブランド社のブランド調査による)であり、2社の連携は、お客さまに対する先駆的な価値あるイメージも提供できる。

——具体的に進んでいることは。

工藤 当ラボには開設以来、連日4〜6人が集まって、市場調査、介護関連事業者の調査などを行い、具体的な提携交渉にも取り組んできた。

太田 共同投資第1弾の「笑美面」は、高齢者本人や家族の意向・ニーズを的確に把握し、介護

施設の詳細な情報に基づいてその方に合った介護施設を紹介している。

工藤 介護施設への入居前に施設見学をするとしても、多くの施設を見て回るのは大変。ケアマネジャーがカバーしている地域が限られていることも踏まえれば、多くの施設を見て専門的なアドバイスを提供できる施設紹介事業者が活躍すると思うので、提携関係を強化していきたい。

——提携先などを調査する方法は。

太田 現在は東京と大阪を中心に、大規模に開催される介護関連の展示会や常設の展示(例えば大阪市のATCエイジレスセンター)などに足を運んでいる。大学などの研究機関や、スタートアップ事業者の皆さまとも協議を行っている。

工藤 例えば「これがあれば在宅介護が大きく変わる」といった、エッ

ジの効いたサービスを提供したい。パイロット事業として、東日本および西日本の一部地域で具体的なサービスを開始する計画だ。

——保険契約者に対する位置付けは。

工藤 ラボで開発していくサービスは、両社の保険契約者とそのご家族に向けて提供することを想定している。高齢者やご家族に安心を提供することで、新しい顧客価値を提供できる。本来に困ったときに高齢者の支えになれることは、両社の営業現場にとっての強みにもなる。

太田 保険業界では、商品販売における連携は進んでいるが、競争相手である会社と共にサービスを開発するのは、これまでになく斬新な取り組みだ。お客さまに受け入れられる良いものを提供していきたい。パイロット事業をスタートしてからは、利用率やその感想などを検証して、サービス内容を向上させていきたい。

で、高齢化が最も早く進んでいるのが日本だ。「ウエルエイジング共創ラボ」の取り組みは、アクサグループの他国での展開の先駆けにもなると考えている。

工藤 パイロット期間中に、エリアを拡大するか、サービス自体をアップグレードするかなどを検討したい。また、介護関連事業者との提携に加えて、将来的にわれわれが介護分野のサービス提供をしていく可能性も排除せず検討していきたい。

太田 世界各国の中